

入選 秋田県 田村 日和 様 (短大生)

私が年金について知ったのは、祖父が亡くなった時だった。

7年前の3月、祖父は亡くなった。肺がんだった。病気が発覚するまでずっと元気だった祖父が、約半年という刹那の間に息を引き取った。

祖母はパーキンソン病を患っている。50代の頃に病気にかかり、今年で82歳になった。年を重ねるにつれ症状は悪化の一途を辿り、10年ほど前から日常生活を自力で送ることは出来なくなっている。そんな祖母をおいて祖父は逝ってしまったが、祖父には残していったものがあった。それが、年金だった。

私は最初、年金と聞いて漠然と、マイナスのイメージをもっていた。なぜなら、ニュースや新聞などでよく、「払わなければならないのに自分が受給できる歳になったら貰えない可能性が高い」という問題提起がされていたからだ。負担は大きいのに見返りが無いのは誰でも嫌だと感じると思う。私もそう思った。しかし、年金についての講義を聞いて、年金制度は決して悪いものではないと思えるようになった。

まず、若者が年金に対して良いイメージがないのは、私たちがイメージする年金が老齢年金だからだ。老齢年金とは、65歳になったら生活費の一部として受け取る年金のことをいう。年金にはこの他に、障害年金と遺族年金があることを知った。遺族年金は、一家の働き手が亡くなった時にその配偶者と子どもが受け取れる年金だ。どちらも万が一の時に受け取れる、若者にとっても大切な社会保障であり、生活を立て直していくためのお金だ。つまり、年金とは、若いうちに貯めた貯金を老後に貰えるものではなく、保険であることを理解する必要がある。

つぎに、「貯金は三角、保険は四角」という言葉があるように、貯金と保険は違うものだ。貯金は積み立て式で、残高は三角形になるが、万が一の時には、それまで積み立てられたお金しか家族に残すことができない。一方、保険は万が一のことがあっても、約束した一定の金額を受け取ることができるため、四角形になる。それらを考慮すると、自分に何かあったら得だったとか、何もなかったら損だったとは一概にいえるものではないといえるだろう。保険というのは、お金を払い続けて何もなかった時に、自分の身に何もなくて

て良かったと思えることが大切だと思った。

自分は無関係だと思っていた年金や年金制度は、自分が思っていたよりずっと関与していたことが分かった。また、ほとんど知らなかった年金について知ること、知る前よりもプラスのイメージをもつことができた。

祖母は現在、祖父が残した年金で施設に入って生活している。祖父が年金を何年も前から貯金していたことを、祖母は何も知らなかった。祖母を支えているのは、祖父が残っていた資産だ。年金とは、大事な保障であり資産であることを学ぶことができた。祖父が残っていたものはとても偉大だ。講義を通して、そのことに気づくことができて、そして年金について知ることができて良かった。